

「日々の理科」(第 2269 号) 2020, -9, 28

## 「八ッ場ダムの水陸両用バス (3)」

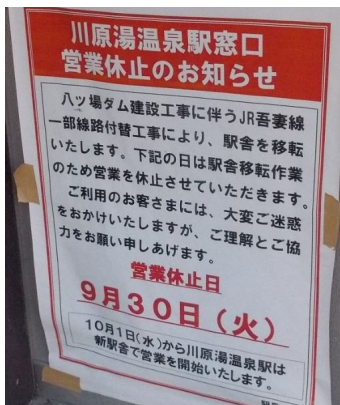
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



ダム湖に沈む前の吾妻線川原湯温泉駅は、昔ながらの駅舎で、そのたたずまいに人気があった。小さな駅ながらも、温泉街のすぐそばにあり、上野駅から直通の全特急列車も停車する優等駅だった。



私が最後に訪れた時には、すでに駅頭に「駅窓口営業休止」「駅舎移転」の予告の張り紙が掲示されていた。駅舎はもちろん、前後の線路も水没するので、はるかに高い土地に、線路も駅も温泉街もまとめて移転するのだ。



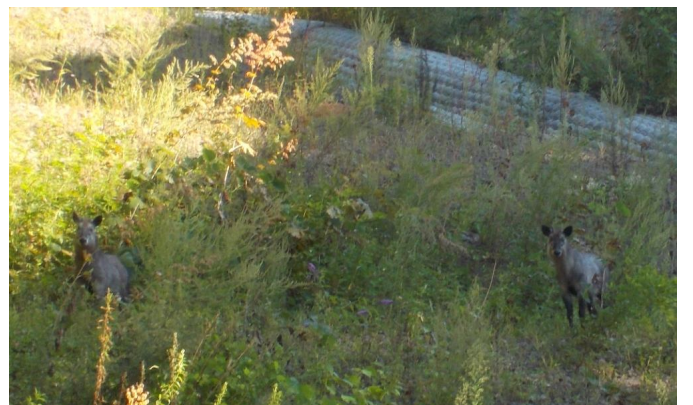
移転前の川原湯温泉駅は、日本のローカル線のどこにでもありそうな駅だった。この駅のあった土地は、現在ダムに近い湖底に沈んでいる



写真は移転後の川原湯温泉駅である。ダムが満水になっても決して沈まない高台にある、近代的な設備の駅だ。ローカル線には珍しく駅員さんのいる有人駅だ。残念ながら特急は通過、しかも肝心の移転後の川原湯温泉街から非常に遠いので、一日の平均乗降客はわずかに19人。群馬県内の有人駅では最低記録だという。一体何の為に造った新駅なのか、理解に苦しむ。



移転直前の川原湯温泉街は、すでに営業している温泉宿はほとんどなく、ゴースト・タウンと化していた。かつては特急が着くたびに、大勢の観光客で賑わい、温泉卵を売る店なども見られた。



人間の営みが消えると現れるのが野生動物だ。温泉街に人の気配がなくなると、警戒心の強いカモシカも現れるようになった。写真に写っているカモシカのいる斜面も、現在はダム湖の湖底斜面になっている。